

(川内市中郷町鶴峯)

位置と環境

薩摩国分寺跡の北方1km余、川内川右岸の丘陵末端部に立地している。

調査の経緯

窯の所在は、すでに昭和10年代には知られていたらしいが、昭和41年(1966)に日本考古学協会窯業部会の調査として小田富士雄・河口貞徳らによって発掘調査が行われた。

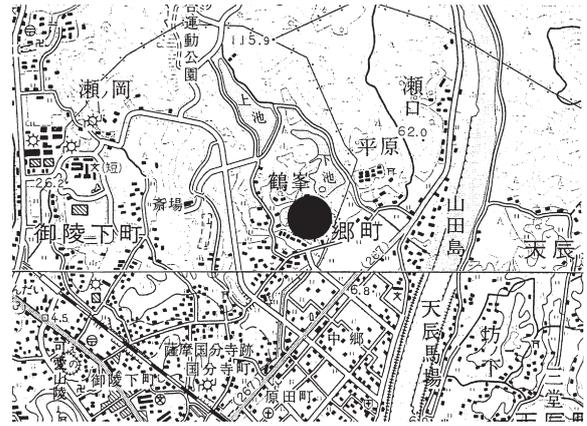
遺構と遺物

瓦窯跡2基と、須恵器の窯跡1基がある。瓦窯跡は台地の崖端に掘られた切り抜き式登り窯であるが、平面形は平窯様式をした折衷形態である。

第1号窯跡は全長6.5m、袋状の燃烧室と長方形の焼成室からなる。燃烧室は道路拡幅や土取りによって焚口や天井部が破壊され、長さ2.2mほどが残っている。最大幅は1.8mあるが、焼成室との境近くは1mしかない。床面は平坦である。焼成室は長さ4.3m、幅1.6mで、中央の高さ1m、奥壁は垂直に立ち上がり、煙道を形成している。床面は25度の傾斜で奥へ上がり、四条のロストルを設けている。奥の方は窯詰めのみで瓦が残っていた。焼成には、玉縁付き丸瓦をロストルに橋渡しして並べ、その上に平瓦を合掌式に横方向に立て並べ、合わせた瓦のなかに玉縁付き丸瓦を1枚ずつ挿入するという形で二段に窯詰めし、なお天井までにすき間のある箇所にも詰める方法をとっている。

第1号窯跡は丸瓦と平瓦だけを焼き、1回の生産高は460枚(平瓦320枚、丸瓦140枚)ほどであった。平瓦の叩き目には太めの縄目、細目の縄目、細かい格子、粗い格子の4種類のほか、無文のものがみられ、これらの瓦が一つの窯で同時に焼かれている。創建時の薩摩国分寺で、この5種類の平瓦が同時に使用されていたことは、瓦の出土状況からも認められる。平瓦・丸瓦とも大きさに個体差がほとんどない。面戸瓦2も出土している。

第2号窯跡の構造も第1号窯と同じであるが、焚口のあたりは現道下にあつて調査できなかった。焼



第1図 鶴峯窯跡の位置

成室は長さ1.2m、幅2mである。床面は25度の傾斜で奥へ上がり、五条のロストルを設けている。奥壁沿いに垂直に一辺20cmの方形をした煙道が地上に通じ、地表面にはふせぎ石1個が半分かぶせた状況で残されていた。この窯では平瓦、丸瓦のほかに軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦など特殊な瓦を焼いている。これらはいずれも創建時の瓦であった。

第3号窯跡は、台地面につくられた半地下式の無段登り窯で、焼成部の長さは4.6mあり、焼成部の傾斜角度は入口で20度、奥で40度となっている。燃烧部入口と煙道近くに径20cmくらいの粘土支柱があり天井を支えている。須恵器を焼いた窯である。蓋、椀、甕などがみられ、8世紀の古いころより下らないものである。

特徴

- ・薩摩国分寺創建時の瓦を焼いた窯である。
- ・窯詰めの状態がうかがえる貴重な窯である。
- ・隣接して8世紀前半の須恵器窯跡がある。
- ・登窯と平窯の折衷形態をとった窯構造をしている。

資料の所在

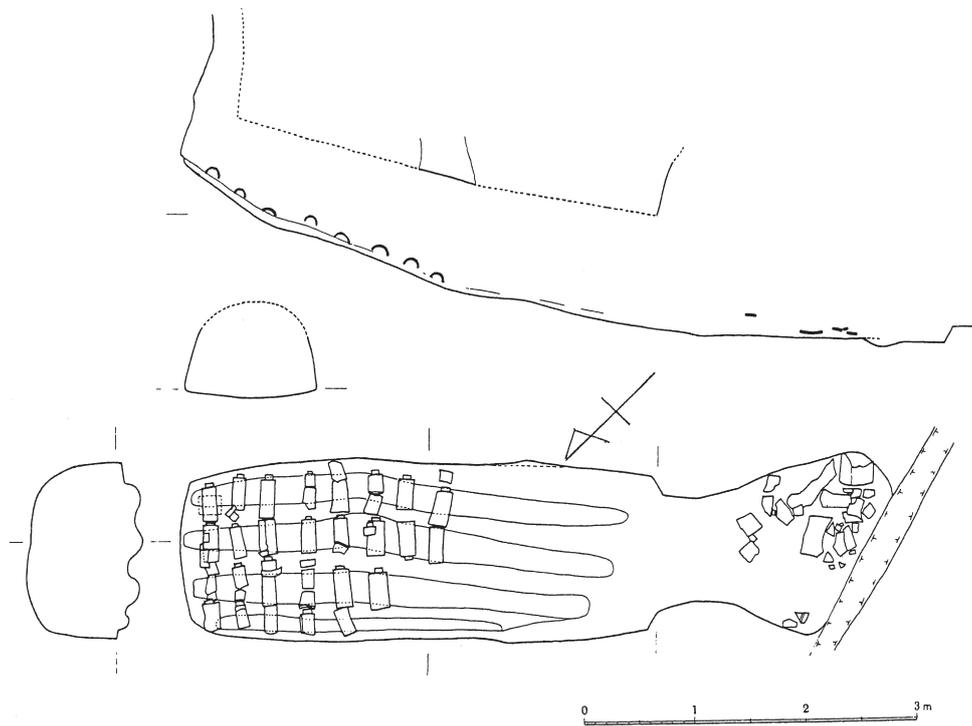
昭和51年に国史跡に指定され、1号・2号は現地保存・公開されている。

出土した瓦は、河口貞徳宅に保管されている。

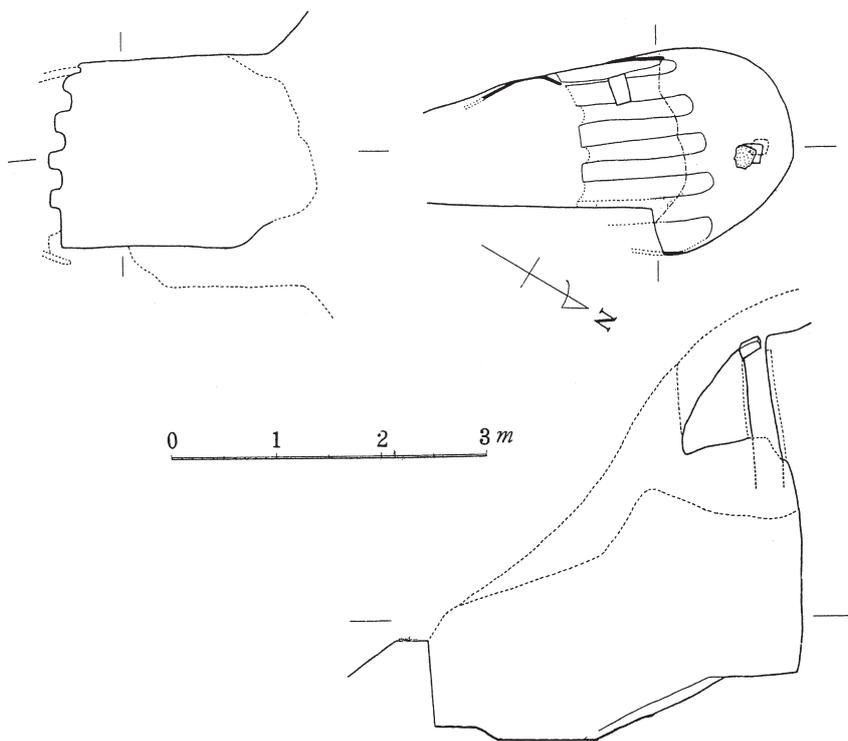
参考文献

鹿児島県教育委員会1975「鶴峯窯跡の調査(薩摩国分寺瓦窯の調査)」『薩摩国府跡・国分寺跡』

(河口貞徳)



第2图 鹤峰第1号寨迹



第3图 鹤峰第2号寨迹